



世界ミステリ全集

2



どもりの主教
屠所の羊
すばらしいペテン

E・S・ガードナー



早川書房

世界ミステリ全集 2

E・S・ガードナー

「どもりの主教」田中西二郎訳

「屠所の羊」田村隆一訳

「すばらしいベテン」宇野利泰訳

1972年4月20日初版印刷 1972年4月30日初版発行

発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京(254)1551〜8 振替 東京47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製

函紙・駿河製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価 1300円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えます〉

0397-807020-6942

目次

どもりの主教……………3

屠所の羊……………197

すばらしいペテン……………409

E・S・ガードナーについて〈座談会〉……………571

があどなあ・ほうだん……………597

E・S・ガードナー著作リスト……………619

ど
も
り
の
主
教

E
・
S
・
ガ
ー
ド
ナ
ー
田
中
西
二
郎
訳

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1972 Hayakawa Shobo

THE CASE OF THE
STUTTERING BISHOP

by

ERLE STANLEY GARDNER

Copyright © 1939 by

ERLE STANLEY GARDNER

Translated by

NISHIJIRO TANAKA

Published 1972 in Japan by

HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.

This book is published in Japan by arrangement

with THAYER HOBSON & COMPANY through

CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

ど
も
り
の
主
教

登場人物

ペリイ・メイスン	弁護士
テラ・ストリート	メイスンの秘書
ポール・ドレイク	私立探偵
ウィリアム・マロリイ	オーストラリアから来た主教
レンウォルド・C・ブラウンリー	銀行家
ジャニス・ブラウンリー	レンウォルドの孫
フィリップ・ブラウンリー	ジャニス・ブラウンリーの従兄
ジャニス・シートン	看護婦
ジュリア・ブラナー	ジャニス・ブラウンリーの母
ステラ・ケンウッド	ジュリアの友人、同居者
ゴードン・ピクスラー	兇行現場に居合わせたヨットマン
ヴィクター・ストックトン	探偵
ピーター・サックス	ストックトンの仲間
ハミルトン・バーガー	地方検事
ジョージ・シューメイカー	検事補

メイスン法律事務所の所長室の入口まで来て、入ろうか
 入るまいかとためらうように足をとめた人物に、ペリイ・
 メイスンの視線がきびしく向けられた。

「どうぞ、主教さん」メイスンが言った。

黒ラシャのだぶだぶな牧師服を着た、ズングリした体格
 のその人は、軽く会釈をして、メイスンの指さす椅子の方
 へ進んだ。幅の広いカラーの白さが目立って、日焼けのし
 た顔に灰色の涼しい眼が光っている。頑丈な短い二本の脚
 が、だいぶ履きふるされた黒靴で、元氣よく進んで来たが、
 それを見ていたメイスンは、この人なら、そのいかつい胴
 体を電気椅子へ向って運ぶときにも、この脚で、同じシッ
 カリした足どりで歩くだろう、と思った。

主教は腰をおろして、弁護士と向き合った。

「煙草はいかがです？」ケースをさししながらメイスン

がきいた。

主教は巻煙草のほうへ手をのばしかけたが、途中でその
 手をとめて言った、「さっきから一時間ほど巻煙草をすう
 ていました。これじゃと、一本すうのに、フ、フ、二口で
 すわい」唇がもつれると、主教は口をつぐみ、二度ほどゆ
 っくり呼吸して、落着きをとるもどそうとする様子だった。
 そのあとで、ピアニストが間違えて指をすべらせたのを埋
 め合わせるために殊更つよく鍵盤を叩くように、声に力を
 こめて言葉をついだ。「失礼して、自分のパイプをつけさ
 せていただきますうかな」

「さあ、さあ、どうぞ」とメイスンは答え、客が左のポケ
 ットからやおら取り出した太くて短いパイプの感じが、持
 主の感じとそっくりだなと観察していた。

「秘書から聞きました。オーストラリアのシドニーから見
 えられたそうですな。お名前はウイリアム・マロリー主教
 さん、過失致死事件でご相談があたりだというのですな」
 客の話しやすいように、弁護士はテキパキと切り出した。

マロリー主教はうなずいて、ポケットから革の袋をだし、
 香りのいい刻み煙草を、よく磨きのかかったブライアの火
 皿に詰めこみ、彎曲した柄の端をガッチリ歯と歯でくわえ
 てから、マッチをすった。その手もとをみまもるメイスン

には、主教が両手でマツチの火を蓋つたのが、指のふるえを防ぐためなのか、それとも癖で機械的に風を防ぐ所作をしただけなのか、どちらだろうと考えたが判定がつかなかった。

ゆらめく光に照らされた広い額、頬骨が高いので平たい感じのする顔、一徹そうな顎の形などを、眼を細めて、メイスンはいじくりと観察した。

「うかがいましょう」彼はうながした。

マロリイ主教は、五、六回、小さな煙の雲を吐いた。不安そうに椅子のなかで腰をもじもじさせるようなタイプとはちがうが、内心の落ち着いていないことはそのあらゆる挙動が示していた。やっと口を開いた。

「なにぶん、法律を習ったのは昔のことで、だいぶ怪しくなったりましてな、その、公訴の時効についてお訊きしたいのです——カ、カ、過失致死罪の」

どもったのはこれが二度目で、パイプの柄はガッチリ歯と歯で締めつけられていた。その歯のあいだからパッパッと吐きだされる煙が、神経のいらだちと、うまくしゃべれないもどかしさを語っていた。

メイスンはおもむろに答えた。「この州には出訴期限法というものがありません。殺人罪と公金横領罪または公

文書偽造罪とを除くすべての重罪は、犯罪が行われてから三年以内に起訴されなくてはなりません」

「犯人が発見できなかったとしますと？」マロリイ主教は煙草の煙の青い薄霧のなかから、灰色の眼で熱心に弁護士の顔をうかがいながら訊ねた。

「被告が州外にいる場合は、州内にいない期間は計算されません」

主教は急に視線をそらせたが、それより早くその眼にうかんだ失望の表情は包む由もなかった。

メイスンは楽々と、流暢に話しつつける——手術の前に患者の気持を楽にしてやろうとする医者の子に、それは似ていた。「つまりですな、一定の年数を経ると、被告が自分の利益になるような証拠をもちだすことがむずかしくなります。検察当局がカビの生えた犯罪事件で目撃者の証言を手に入れることがむずかしいのと、ちょうど同じ理屈です。そういうわけで、さっきお話した最も重大な犯罪以外のすべての犯罪について、法律は期限をつけているのです。それは法律上の出訴期限ですが、一方、実務上の期限というものもあります。ですから、ある犯罪を、地方検事が、法規上は起訴して差し支えない場合であっても、年数がたつてしまつて、起訴をためらわざるを得ないというこ

ともあるんです」

しばらく沈黙がつづいた。主教は頭のなかにある考えを、どんな言葉で装わせようかと、手間どっているらしい。話を本筋へ持ってゆくために、メイスンは笑いながら言った。「要するにですね、主教さん、依頼者が弁護士に相談するのは、いわば患者が医者にかかるのと同じことです。抽象的な質問で遠まわしに探りをお入れにならんで、頭のものにあることを、そのまま話してごらんになったらどうですか」

マロリー主教はひどく意気こんで言いだした。「するとあなたは、その犯罪が二十二年前に行われたものだったら、被告がこの州内にいなかった場合であっても、地方検事はキ、キ、キ、起訴しないだろうと言われるんですか？」——今度は、はやくこの質問に対する答えをきこうと意気こんでいるために、自分の発音障害をきまりわるがる様子は少しも見せなかった。メイスンは答えた。

「あなたの方では過失致死だと考えても、地方検事の方では殺人だと考えるかも知れませんか」

「いや、これは過失致死です。逮捕状は出たが、本人がうまく逃げたものじゃから、とうとう執行されなかったのですよ」

「どういう情況だったのです？」

「自動車を運転していて、ほかの車とぶつかりましてな。その女……いや、ソ、ソ、その人物は……酔っておったと検事側は主張したわけですよ」

「二十二年前ですか？」

主教はうなずいた。

「そういうケースは、二十二年前には、あまりたくさんはありませんでしたね」客の表情をみまもりながら、メイスンは言った。

「仰せのとおりじゃ」主教は答えた。「しかしこれは、この州でも辺鄙な県での出来事でしたな、その地方検事が、その……ひどく仕事熱心な人で……」

「という、どういうことですか？」

「つまり、法律の許す限りの専門的な手段を、一つも抜け目なく利用しようとしたわけですよ」

メイスンはうなずいて言った。「ひょっとしたら、主教さん、あなたが被告だったんじゃないませんか？」

主教の顔にうかんだ驚きの色は、どう考えても本ものだった。

「当時、わしはオーストラリアにいました」と彼は答えた。「二十二年というのはい——」考えつめて、細くなった眼で、

メイスンは主教をみつめ、「いくら地方検事が仕事熱心でも、長すぎますなあ。そればかりじゃない、地方検事は次から次へと人が変わるんですからな。二十二年間には、その県の政治情勢も、よっぽど変っているはずです」

主教は、政治情勢の変化などは、目下の問題と何の関係もないと思つてゐるらしく、上の空でうなずいた。

「したがつて」メイスンは言つた。「いまだにその事件をあなたが氣にしておられるところを見ると、仕事熱心な地方検事以上の何ものかが、事件の背後に伏在していると、考えられますね」

マロリイ主教はパチッとまたたきをして、眼をまるくし、メイスンをみつめた。「や、メイスンさん、あんたは実に、キ、キ、機敏な弁護士さんじゃな」

数秒間、わざと間をおいてから、メイスンは言つた。「主教さん、いかがです、あとの話をお聞かせになつては？」

マロリイ主教はパイプを一服してから、だしぬけに言つた。「報酬は成功払いということで事件を引き受けられることがありますか？」

「ええ、あります」

「貧しい女性のために、百万長者を向うに廻して闘つてみ

る氣がありますか？」

メイスン是不敵な色をうかべて、「依頼者のためなら、悪魔だって向うに廻しますよ」

主教は、どこから話を進めようか、そのいとぐちを探す様子で、パイプをくゆらせながら数秒間、無言で考えこんでいた。それから、パイプの温かい火皿を掌に包みこむように持つて、「レンウォルド・C・ブラウンリーという男をご存じですか？」

「話は聞いています」

「あの男のために、何か仕事をされたことが……いや、つまり、あんたはあの男の弁護士をしておられるのですか？」

「いや」

マロリイ主教は言つた。「あんたにこれからご相談する事件の相手方は、レンウォルド・ブラウンリーなのです。莫大な額の金が、それにはからまつております。どれほどか、わしは知りませんが、百万か、それより多いかも知れんです。あんたには真正面から素手でぶつかつていただかなくてはならん。もし勝つてくだされば、大きな報酬になりますよ、まあ二、三十万ドルのな。

あらかじめ申しておくが、ブラウンリーはテ、テ、手ご

わいですぞ。きつと厄介な事件になります。あんたの仕事は、これまでひどい仕打ちを受けてきた、或る婦人の権利を護ってやることじゃ。そうして、裁判に勝てるたつた一つの見込みと言えは、このわしが証人として証言することしかありませんのじゃ」

メイスンの眼つきがけわしく、警戒の色をみせた。「だから、どうなんです？」

マロリー主教は首を振った。「わしを誤解なすってはいかん。わしは何も求めておるのではありませんぞ。自分としては、何ひとつ欲しくはない。ただ正義を行わせたいのです。それで、もしわしがこの事件の主要な証人になるとすれば、困ることがある。つまり、わしが事件以前から被告側と関係があつて、その味方をするように見られるとすれば、わしの証言の価値を弱めはせんかということですよ」

「ありません」メイスンはうなずいた。

主教は唇のあいだからパイプの曲つた柄を抜きだし、太くて短い人さし指のさきで火皿のなかの煙草を押しかけたためから、ゆっくりとうなずいて、「どうもそういう気がするのですて」

メイスンは無言で油断なく相手の言葉を待っている。マロリー主教はまた話しました。

「それじゃから、わしはここへ来たことを誰にも知られたくないのです。むろん、そのことについて、嘘もつきたくはない。いよいよ証言台に立つた折に、事件に利害関係を持つておることについて質問されたら、わしは正直に答えます、けれどもそういう質問が出なければ、われわれ関係者みんなにとって、その方がよからうと思ふのです。

さて、わしはあと一時間ほどしたら、電話します。そのときに、あんたに来ていただく場所を申ししますが、そこで重大な関係のある人々にご紹介しましょう。その人々の話は信じかねるように聞えると思ふが、真実です。これは一人の大富豪が、まことに無慈悲、不正であつたという事件なのです。その会見がすめば、わしは姿をかくします」とマロリー主教は言葉をついで、「あんたがわしを探しだして、証人として法廷へ引き出すまで、決してあんたに連絡をとらんことにしなくてはなりません。探しだすことについては、メイスンさん、あんたに敏腕をふるつていただくほかはないが、しかしその点では、わしはあんたをあてにしておりますぞ」

ここまで話したことに、すっかり満足をおぼえたといった様子で、主教はひとりでうなずいた。そしていきなり椅子から立ち上ったかと思うと、例の短い切株のような脚を

踏みならして出口の方へ歩いて行った。廊下へ出るドアを開き、ふりかえり、メイスンに頭をさげると、ドンと扉を閉めて行ってしまった。

奥の室で話の要点をノートにとっていた秘書のデラ・ストリートが出て来た。「あの人をどうお考えになって、所長？」

ズボンのポケットに両手を深くつつこみ、自室の中央に仁王立ちで、メイスンはじいっと絨毯の一点を睨みつけていた。「でんでわからん」とやがて言った。

「あれ、どんな人だと思いいなるの？」デラがまた訊いた。

「あれが主教だとすれば、なかなか人間味があつて、坊さんらしいコチコチなところは少しもない。あのズングリしたパイプにしても、そのほか全体の感じが、いかにも鷹揚な、世故に長けた人らしい。相手方から反対訊問を受けたら、嘘はつきたくないが、そういう質問をさせないようにするのが、おれの役目だと言ったね、そこに注意する必要がある」

「主教だとすれば——なぜそんなことをおっしゃるの？」

ゆっくりとメイスンが答えた、「主教というものはども

らないよ」

「え？」

「主教になるには、永年ながねんの修業が要るよ。人なみすぐれた能力があつて、しかも公衆の面前でおしゃべりをしなくてはならない。どもりの男は、弁護士になれないのと同様に、牧師にもなれないものだ。だがもし、かりにどもりで、しかも牧師になった男がいるとしても、とても主教にはなれないはずだよ」

「わかったわ、そうすると所長は……」

メイスンの顔をみつめていたデラは驚いて、目をまるくして黙ってしまった。

弁護士はゆっくりとうなずいて、「あの男は、おそろしく俐口な詐欺師かも知れん。が、また一方から考えると、主教ではあるが、何かよほど強い感情的なショックを受けるような経験をしたのかも知れん。おれの法医学の知識によると、成人がどもりになる原因の一つに、急激な感情的ショックがあるんだ」

デラ・ストリートは心配そうに言った。「ねえ、所長、いまの人の話をいくらかでも真にうけて、レンウオールド・C・ブラウンリーみたいな億万長者を敵にまわすとすれば、その前にあの人が本物の主教さんか、それともインチキ師

か、それを知る必要があるんじゃないかしら。本物とニセ物では、大へんな違いですもの」

メイスンはうなずいて答えた。「おれもそのとおり考えていたよ。ドレイク探偵局へ電話して、ポール・ドレイクに、どんな用件があっても構わないからほうりだして、いますぐこっちへ来るように言ってくれ」

2

ドレイク探偵局の主宰者ポール・ドレイクは、大きな革張りの脇掛椅子に横むきに寝そべって、椅子の片方の脇に背中をもたせかけ、もう一方の脇にぶらんと両脚をぶらさげていた。無表情にペリイ・メイスンの顔をのぞきこんでいる、どんよりした、無表情な眼は、やや出目である。顔の色は赤みがかっていて、その顔面筋肉がたるんでいるときには、口の恰好が鯉のような妙な形になり、おどけたユーモアのある顔つきになる。その風貌があまりに探偵らしくないおかげで、この男はしばしば驚くべき成功をおさめることがあった。

ペリイ・メイスンはチョッキの腋孔に親指をひっかけて、オフィスのなかを行きつ戻りつしながら、肩ごしに言葉を投げつけている。

「オーストラリアのシドニイから来た、ウィリアム・マロ

リイと自称するイギリス教会の主教が、相談に來た。無口で、野良^{のち}ではたらく男のような顔をして……わかるだろう、寒風に吹かれて永年くらしのように、渋紙みたいな皮膚をしているんだ。……いつこつちへ來たのかはわからない。二十二年前に、田舎の方の県で酔っぱらい運転のために起つた過失致死事件について、話をききたいというのだよ」

「人相風体は？」と探偵が訊いた。

「年の頃は五十三から五十五ぐらい、身長五フィート六ないし七インチ、体重は百八十ポンド、牧師の着る丸襟のラシャ服を着て、煙草はパイプが好きで、たまには巻煙草もすう。眼は灰色、頭髮は黒っぽくて毛は濃い、コメカミのまわりは白髪まじりで、なかなかしっかりした人物、ときどきどもることがある」

「どもる？」ドレイクが聞きとがめた。

「そうなんだ」

「という、教会の主教で、そうしてどもるんだね？」

「然り」

「主教はどもるもんじゃないよ、ペリイ」

「そこなんだ。このどもりは、たぶん何か感情的なショックを受けたために、近頃はじまったものに違いない。その感情的なショックが何からきたか、おれはそれを知りたいん

だ」

「当人はそのどもりをどんなふうに思ってるのかね？」ドレイクが訊いた。「言いかえると、どもったときに、どんな態度をとったかね？」

「ちょうどゴルフアーが、球の上の方を打ってドライブをやりそこなったときとか、マシーを打ちそこなったときとかのような態度だったな」

「氣に喰わんね、おれは」と探偵が言つた。「おれにはイカサマのように聞えるな。主教だということが、どうしてきみにわかるんだ？　ただ本人の言うとおりに受け取つてるのかい？」

「まあそうだ」メイスンはごくあっさりと言定した。

「まあおれに調べさせて、すっかりネタを上げることだな」

「それをやってもらいたいんだよ、ポール。主教さんは、一時間以内におれに連絡するはずになつてゐる。それからしばらくすれば、おれは莫大な金にかかわる事件をやるかやらんか、返事をしなくてはならない。もしあの主教さえまともなら、おれはうんと言いたい氣持になるだろう。イカサマなら、いやと答えないんだ」

「事件というのはなんだ？」